

(財)住宅リフォーム・ 紛争処理支援センター 理事長賞

タイトル アーチ開口の家
タイプ 持家一戸建
構造 在来木造

所在地 東京都杉並区
築後年数 30年
施工期間 120日間
該当工事面積 123 m²
総工事床面積 130 m²
該当部分工事費 2,150万円
総工事費 2,150万円
居住者構成 65歳以上:2人
設計会社 (有)ラブアーキテクチャー
一級建築士事務所
担当者:浅利 幸男
施工会社 アートウェップハウス(株)
担当者:岡本 耕



7 リビングと玄関の吹き抜けは廊下を挟んでつながり、天井は滑らかな曲線を描く。ふたつの空間は上部に隙間をもつ造作家具で隔てられ、欄間を透明ガラスとした。



リフォーム前



10 2階廊下よりリビングを見下ろす。床レベルを揃えたデッキテラスにより、リビングは掃出しサッシを介して庭へと広がる。



リフォーム前



リフォーム前



11 右側の手摺は既存の手摺を並び替え白く塗装し、新設した左の手摺と対比的に見せる。



12 書斎。以前は和室だったため、障子の格子を白く塗装して残した。

<リフォームの動機／設計・施工の工夫点／施主の感想・満足度／特筆すべき住宅性能向上の内容など>

介護を支える豊かな建築空間

改修した建物は吹抜けのリビングと全館空調システムを持つ、築30年の木造2階建の建売住宅である。施主（娘）は子供の独立を機に、この家で一人住まいだった母と同居しようと考えた。古家に愛着を持つ母はリフォームを強くは望まなかったが、介護という現実がリフォームを必要とさせた。娘の要望は、高齢の母の生活を1階で完結させ且つバリアフリーとすること、収集している数々の古家具が馴染む内装にすることである。

アーチ壁と持込み家具がつくる空間的広がり

ここでは全館空調システムが建具の無い、アーチ開口による層状の空間構成を可能にした。アーチ壁は家具の背景であると同時に別の家具を切り取るフレームにもなっていて、建築と家具が相互に引立て合いながら、向こう側に広がる空間を暗示させる。

「消去」あるいは「対比と見立て」がつくる時間的広がり

建築は空間的な広がりと共に時間的な広がりを受け止められる器でなければならない。高齢の母の古家に対する愛着を継承したいと考え、娘の持ち込む古家具との相性を考慮しつつ階段や手摺、建具枠等、既存の造作を出来る限り生かすことにした。実現できたのは物理的なバリアフリーを超える精神的なバリアフリーだと確信している。

●性能向上の特性

段差の解消、内外の一体化等バリアフリー

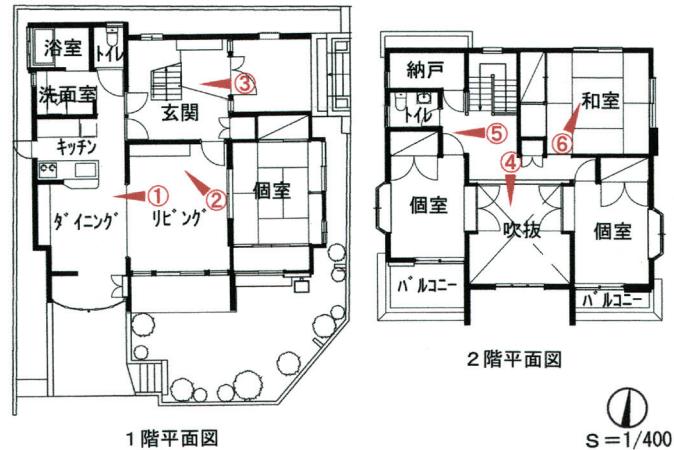
●特に配慮した住宅性能

既存の構造体をできるだけ傷つけないよう配慮しつつ、奥行きと広がりを感じさせる空間を実現させた。

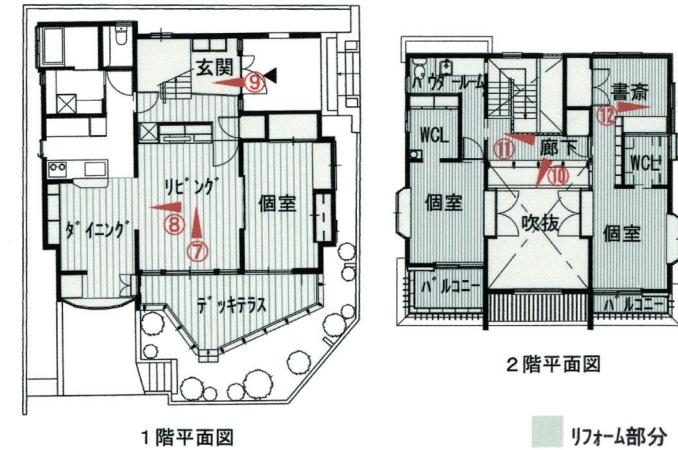


8 個室1のアーチ開口越しにリビングとダイニングを見る。

<リフォーム前>



<リフォーム後>



リフォーム部位： 居室 台所 浴室 便所 洗面所 廊下 階段 玄関 エクステリア マンション共用部

本作品では、いわゆる老々介護まで見越した機能的な空間を求めながらも、母親にとって愛着の深いこの家の面影をできるだけ残すこと、また施主が趣味で集めていた英國系のアンティーク家具も置けるようにすることにリフォームの主眼が置かれている。改修の出発点となったのは以下の2点である。

- 1.新築時からの全館空調に加えて、床暖房により1階の温熱環境を快適にする。
- 2.庭へ出られるようにと広げたデッキの米杉材を内部床にも延長し、居間に広がりを作る。

特に、全館空調により可能になった建具のない構成は、優れた空間効果をもたらしている。家の中心である居間には大きな吹抜けがあり、格子の高窓からの光が、減衰しながら隅々まで回っていくさまは、住宅には性能以上の何か大切なものが必要であることを教えてくれる。当然この光は、慎重に位置を決められた家具類も引き立てている。設計者は家具類に合わせて内装仕上げ材や袖壁の出寸法などを決定したという。アーチもその雰囲気に合わせて設けられたものであるが、視線が抜けて大小のアーチの重なりが随所に見られるようになり、この家独特の雰囲気を生み出している。注意深く選ばれた壁面のクロスや床材の表情は穏やかで、内部全体が落ち着いた光に満たされており、質の高いインテリア空間に仕上げられている。

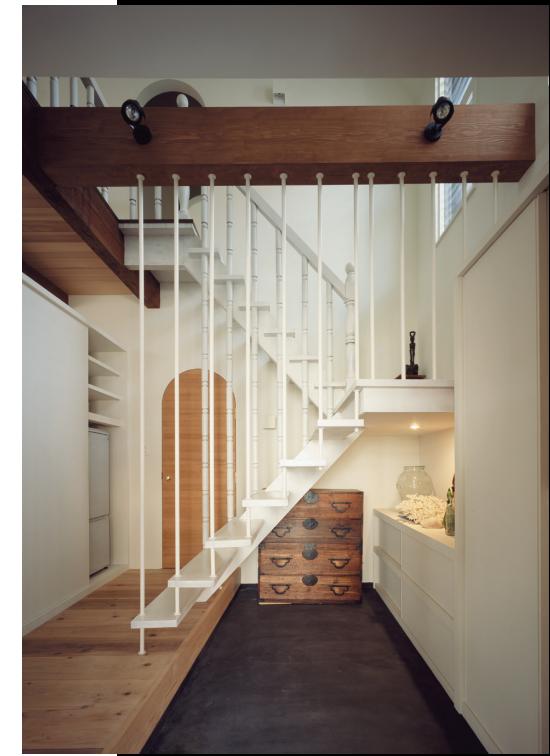
記憶のよすがとして残された障子や階段の手摺子などの扱いにも、奇をてらったようなところではなく、新しい光とインテリアの中に溶け込んでいる。水回りは、車椅子でも使えるようにと以前にリフォームされていたため、ほとんど手が付けられていない。しかし、今回の工事部分とデザイン上違和感なく繋がっていて、設計手腕の確かさをうかがわせる。

施主は国際交流関連の仕事をしているため、外国人学生など多くの訪問者や宿泊者がある。そのため一室空間であり

ながらも、居間と玄関との間を置き家具で区切り、隙間にガラスを嵌めて、明るさと遮音性を両立させている。

これら老練ともいえるきめ細かなデザインを施しながらも、工事費用が適切な範囲に収まっている点、また耐震性能に対しての配慮と対応が抜かりない点も評価出来る。

この作品は、総合的に見てバランスが良く、完成度の高さが感じられる。機能と性能に裏打ちされつつも、内部空間に感じる「いとおしさ」は応募作品隨一と言っても良い。(財)住宅リフォーム・紛争処理支援センター理事長賞にふさわしい内容と判断した次第である。



9 既存の階段と手摺は白く塗装して残した。



リフォーム前



2



3

撮影：西川 公朗（写真No. 7～11）